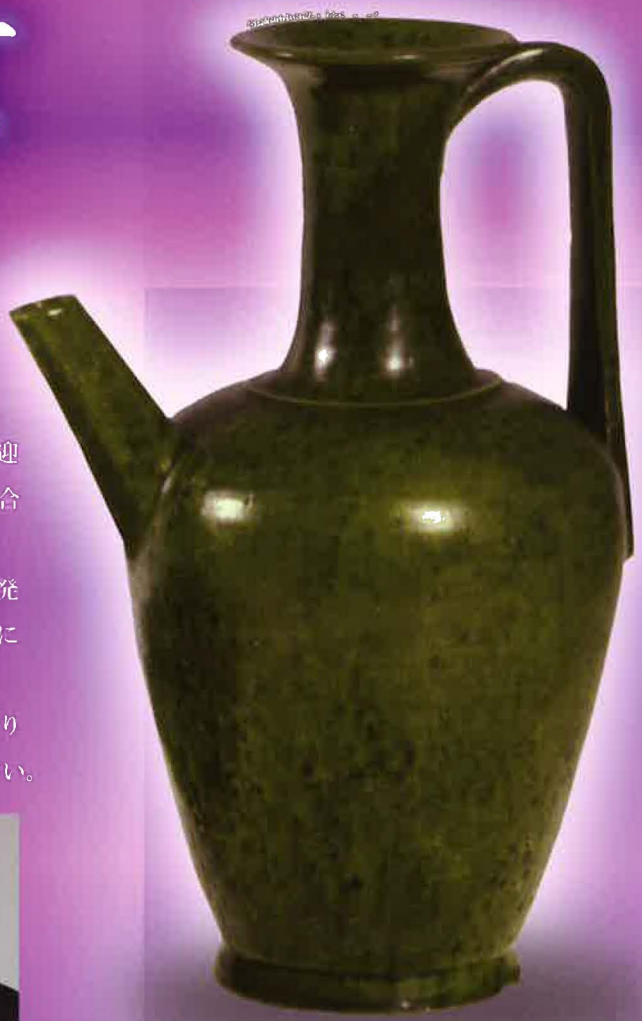
平成28年度 前橋・高崎連携事業文化財展

東国千年の都 10周年記念展示

いまなお ひかり放ちて



前橋・高崎連携事業文化財展の開催にあたって

平成19年度から始まった前橋・高崎連携事業文化財展は、今年で10周年を迎えます。この間、前橋市と高崎市が互いに協力し、開催ごとに定めたテーマに合わせそれぞれが所有する歴史的資産の一端を紹介してまいりました。

この文化財展により前橋、高崎両市の多くの市民の皆さんに、土の中から発見された埋蔵文化財や、これまで大切に保存されてきた歴史資料などを身近に感じていただくことができたと思います。

今回の企画は10周年を記念して、これまでの資料の内から優品を選りすぐり展示するものです。この機会にもう一度、両市の歴史に思いを馳せてみてください。

前橋・高崎連携事業文化財展が、前橋市と高崎市それぞれの地域の歴史を知り、その地域の特性を理解する契機となり、ひいては両市民相互の交流や連帯意識の醸成に寄与することとなれば幸いです

前橋市長
山本 龍

高崎市長
富岡 賢治

主催：前橋市・前橋市教育委員会、高崎市・高崎市教育委員会
後援：上毛新聞社、朝日新聞前橋総局、毎日新聞前橋支局、読売新聞前橋支局、産経新聞前橋支局、日本経済新聞社前橋支局、東京新聞前橋支局、共同通信社前橋支局、時事通信社前橋支局、NHK前橋放送局、群馬テレビ、エフエム群馬、ラジオ高崎、まえばしCITYエフエム（順不同）

旧石器時代の前橋・高崎

「旧石器時代」は、打製石器や骨角器が使われていた時代で、先土器時代・岩宿時代とも呼ばれる。旧石器時代の人々が生活していた更新世は、現在よりも冷涼な気候で、県内では赤城、榛名、浅間山の火山活動が活発であった。当時の人々は動物を追い求めての遊動生活を営んでいたため、旧石器時代の遺跡から住居跡が見つかることはほとんどない。石器がまとまって出土するブロックや、石蒸し料理に使用した「礫群」が見つかる程度で、遺跡から得られる情報は少ない。しかし、石器の分布や、作り方・石材などを多角的に分析することで、当時の人々の生活をうかがうことができる。

石器の移り変わり　石器は、時期によって作り方が異なる。また同時期であっても、日本列島内で地域差が認められる。

群馬県地域の旧石器の編年は、Ⅰ期（ナイフ形石器と斧形石器の時代）、Ⅱ期（ナイフ形石器が発達した時代）、Ⅲ期（ナイフ形石器が小型化した時代）、Ⅳ期（尖頭器の時代）、Ⅴ期（細石刃の時代）に区分されている。その基準となる石器は、槍の先に使用されたナイフ形石器・尖頭器・細石刃で、時期ごとの形態や作り方の変化がよく分かっている。

石器石材の種類　石器の石材は大きく二種類に分けられる。一つは緻密で敲くと鋭く割れるもので、槍先やナイフなど、鋭利な刃を必要とする石器に用いられる。長野県和田峠産の黒曜石が代表であるが、県内では、渡良瀬川で採集できるチャート、三国峠付近産出の黒色頁岩、武尊山や八風山産出の黒色安山岩などの「在地系石材」もある。

もう一つは、県内の河川で採集できる安山岩や砂岩など、質の粗い石材である。主に骨や木の実を砕いたり、石器製作のハンマーとして使用される。

そのとき、ヒトは「いた？」「いなかった？」

前橋・高崎市の旧石器時代の遺跡は、赤城南麓・榛名西南麓・鏑川河岸段丘上に多く、赤城南麓では標高400m以上の山間部でも確認されている。

これに対し、前橋台地・榛名東南麓では旧石器時代の遺跡が見つかっていない。前橋台地は、旧石器時代に浅間山の噴火による泥流が堆積して形成されたため、当時は生活に不適であった。また、榛名東南麓は、古墳時代の榛名山の火砕流が厚く堆積しており、旧石器時代の遺跡の確認が困難で、それが遺跡が少ない理由となっている。

内堀遺跡 石器出土状態

群馬Ⅰ期 内堀遺跡出土の石器群

群馬Ⅱ期 熊の穴Ⅱ遺跡出土の石器群

群馬Ⅴ期 頭無遺跡出土の石器群

縄文時代の前橋・高崎

縄文時代は、今から約15,000年前に始まった。この頃、日本列島はそれまでの寒冷な気候から徐々に暖かくなり、シカやイノシシ、木の実などの動植物豊かな広葉樹の森が誕生した。これにより、定住してムラをつくり狩猟・採集を生業とする縄文時代が始まった。定住生活は土器の使用を可能とし、煮炊きなど調理方法の多様化によって食べものの種類が増え、食生活に大きな変化をもたらした。また、縄文人が作った耳飾り・垂飾などの装身具や、石棒・土偶などは、縄文人の文化レベルの高さを物語る。縄文時代は、土器の形や文様から草創期、早期、前期、中期、後期、晩期に分けられる。今回の展示では、前橋・高崎両市の各期を代表する遺物を紹介したい。

頭無遺跡　前橋市荒子町に所在する柳久保遺跡群中の遺跡である。縄文時代早期の土器が多量に出土し、彫刻した丸棒を回転させて文様を施した押型文土器や、ヘラや貝殻を使って幾何学的な文様を描いた沈線文土器などがある。

五代伊勢宮遺跡　前橋市五代町に所在する。縄文時代中期の住居跡や土坑等が検出され、南関東や東北南部、北陸系統の土器と、在地の土器がまとまって出土した。長期間にわたって各地の縄文人から土器の文様情報がもたらされた結果と考えられる。

上空から見た柳久保遺跡群

頭無遺跡出土の押型文土器

五代伊勢宮Ⅳ遺跡　土坑内遺物出土状態

五代伊勢宮Ⅳ遺跡出土の深鉢型土器

弥生時代の前橋・高崎

弥生時代には、本格的な農耕と金属器の使用が始まった。しかし、群馬県内では弥生時代中期前半までは集落遺跡が希薄で、農耕が生業の主体として定着してなかった。それでも、中期後半の栗林式の成立を画期として遺跡や遺物の内容が変わってくる。この変化は自律的発展だけではなく他地域の影響も受けて成立している。今回の展示で紹介する資料は、他地域との交流など当時の社会を反映した重要な資料である。

弥生時代中期後半の土器　高崎市伊勢廻遺跡出土の土器は、弥生時代中期後半の栗林式土器である。県内の栗林式土器の分布は、長野県千曲川流域と群馬県西部が一つの文化圏であったことを示している。

前橋市西迎遺跡出土の土器は、この栗林式土器をベースとしながらも新潟方面の影響を強く受けており、地理的条件による他地域との交流を考える上での好資料である。

西迎遺跡出土の弥生式土器

運ばれてきたもの　高崎市本郷町の稲荷森遺跡の飾り壷は、東海地方東部からの搬入品である。また高崎市日高遺跡出土の十王台式土器は茨城県から運ばれてきた。ともに弥生時代後期末の地域間交流を示す重要な遺物である。

運ばれてきたのは土器だけでない。高崎市八幡遺跡から出土した、弥生時代後期の銅釧は長野県の千曲川流域での加工品である。また、日本海沿いの流通ルートから長野県を経てもたらされた鉄剣も出土している。当時の交易を考えるうえで貴重な資料である。

稲荷森遺跡出土の飾り壷

赤彩壷　高崎市八幡遺跡出土の赤彩壷は、弥生時代後期の樽式土器終末期の文様構成をよく表している。作りも丁寧で、樽式壷形土器の優品である。

高崎市八幡遺跡出土の赤彩壷

人形土器　県内での人形土器の発見例は、いずれも弥生時代後期樽式土器の時期である。墓域から出土することから、埋葬に関係する土器であったと考えられる。

若田坂上遺跡出土の人形土器

安通・洞遺跡　前橋市粕川町室沢に所在する。縄文時代後期後半から晩期の耳飾りなど、土製装飾品がまとまって出土した。また、石棒や、土版、岩版など祭祀行為に関わる遺物も出土している。

安通・洞遺跡 全景

安通・洞遺跡 土製耳飾り出土状態

安通・洞遺跡出土の土製耳飾り

元総社蒼海遺跡群　前橋市元総社町に所在する。縄文時代前期と中期および晩期の遺跡が見つかっている。元総社蒼海遺跡群（13）では前期後半の板状土偶が出土した。また、元総社蒼海遺跡群（9・10）では、晩期前半の小型台付浅鉢などが出土している。

元総社蒼海遺跡群(13)　土偶出土状態

元総社蒼海遺跡群(9・10)
縄文晩期遺物出土状態

高崎情報団地Ⅱ遺跡　高崎市中大類町に所在する、縄文時代中期主体の遺跡である。低地の土坑群から出土した彩色ある浅鉢は、漆とベンガラに彩られ当時の色合いを残している。内部に漆が塗られ、液体の貯蔵に用いられた可能性がある。

高崎情報団地Ⅱ遺跡　3区土坑群

高崎情報団地Ⅱ遺跡出土の彩色ある浅鉢

水沼寺沢遺跡

水沼寺沢遺跡　小型石棒出土状態

高崎市倉渕町水沼に所在する、高崎市内では珍しい縄文時代中期初頭の五領ヶ台式土器が出土している。また、縄文時代前期の小形石棒や石製のへら状垂飾なども出土しており、縄文時代前期末から中期初頭への変遷を考える上で重要である。

古墳時代の前橋

前橋市の古墳は、旧那波郡の朝倉・広瀬古墳群、赤城南麓の大室古墳群、総社周辺の総社古墳群と、3つの地域に大きなまとまりが見られる。朝倉・広瀬古墳群は、4世紀初頭から7世紀まで古墳が造られた。昭和10年の古墳調査によれば、この地区で154基の古墳が記録されている。赤城南麓では5世紀後半から8世紀まで古墳が盛んに造られ、前橋市域では最も多くの古墳が分布する。総社古墳群は、榛名山の裾野、利根川西岸の古墳群で、5世紀後半から7世紀後半まで継続する。7世紀には大型の方墳が造られ、特に宝塔山古墳では高度な石材加工技術が認められる。

前橋天神山古墳　朝倉・広瀬古墳群中の前橋天神山古墳は、東国では最大級の初期前方後円墳で、毛野地域の盟主的な豪族の墳墓と考えられている。主体部からは、銅鏡、鉄製・銅製武器類、鉄製農耕具類など豊富な副葬品が出土している。

前橋天神山古墳の粘土槨

前橋天神山古墳出土の三角縁神獣鏡

赤城南麓の中期古墳　荒砥川左岸にある今井神社古墳は、前橋市では数少ない中期大型前方後円墳であり、地域の有力首長の墳墓と考えられている。粕川町膳の白藤古墳群は5世紀後半から6世紀前半の初期群集墳である。70基以上の小規模円墳や竪穴式石槨が調査された。前橋市荒子町にある舞台遺跡1号古墳は帆立貝形の中規模前方後円墳で、墓前祭祀にともなう、石製模造品が多数出土している。古墳時代中期は祭祀行為が盛んで、西大室丸山遺跡では、巨石祭祀跡が見つかっている。

今井神社古墳

舞台遺跡1号古墳
画像提供：群馬県立歴史博物館

白藤V-4号古墳の埴輪馬　白藤古墳群中のV-4号古墳は、中期後半の小円墳である。墳丘裾から出土した馬形埴輪はユーモラスな顔をしている。馬具が装着された騎乗用の馬であるが、その表現は簡略で製作技術も手慣れていない。

白藤V-4号古墳出土の埴輪馬

西大室丸山遺跡の巨石祭祀

赤城南麓の火山性泥流丘上に立地する。巨石祭祀遺構からは赤城山が一望できる。赤城山に関わる祭祀跡と考えられ、大量の手捏土器や石製模造品が出土している。

西大室丸山遺跡　祭祀遺構から赤城山を望む
画像提供：(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

赤城南麓に君臨した王者の古墳　大室古墳群の中核である前・中・後二子古墳は、赤城南麓地域の有力首長の墳墓として、古墳時代後期の6世紀に継続して造られた。

6世紀初頭の前二子古墳は、群馬県内で最も早く横穴式石室を採用した古墳とされる。周溝と外堤が廻り、全長は148mである。6世紀中頃の中二子古墳は全長170mと最も大きい。南側の中堤には盾持人埴輪と円筒埴輪が立ち並んでいた。また、北側の中堤からは線刻人面付円筒埴輪が出土している。6世紀後半の後二子古墳は、巨石を積んだ半地下式の石室を有する。3古墳では一番小さく全長106mである。前方部から犬と親子猿の小像が付いた円筒埴輪が出土している。

中二子古墳出土の線刻人面付円筒埴輪

後二子古墳出土の小像付円筒埴輪

前二子古墳石室内の副葬品　前二子古墳は全長13.8mの長大な横穴式石室を有する。明治11年に石室が開かれ、土器や装身具類、鏡、金銅製馬具など、多数の副葬品が発見された。そのうち須恵器装飾筒形器台は、朝鮮半島の新羅や伽耶地方に系譜が求められる。前二子古墳の被葬者は、朝鮮半島と強い繋がりを持っていたと考えられる。

前二子古墳 石室

前二子古墳 石室内出土遺物

山王金冠塚古墳　朝鮮半島との繋がりは、朝倉・広瀬古墳群中の6世後半の山王金冠塚古墳にも認められる。山の字を重ねたような立ち飾りを持つ金銅製の冠は、朝鮮半島三国時代の新羅王墓出土の金冠に系譜が求められる。

山王金冠塚古墳

金銅製冠
(東京国立博物館蔵)

古墳時代の高崎

高崎市の古墳時代は、4世紀に前方後方墳の元島名将軍塚古墳が築造されたことから始まる。中期になると高崎市最大の浅間山古墳（全長171.5m）など、高崎市東部を中心に巨大前方後円墳や大型円墳が築造される。後期前半（5世紀後半）になると群集墳が築造され、また、中小規模の前方後円墳が高崎市北西部まで拡大する。旧群馬町では豪族居館の三ツ寺Ⅰ遺跡や北谷遺跡、保渡田古墳群が築造され、榛名山東南麓に一大勢力が築かれた。後期後半（6世紀初頭）には竪穴式石室から横穴式石室へと埋葬形態が変化し、6世紀後半から7世紀初頭になると、観音山古墳や観音塚古墳などの大型前方後円墳に巨石構造の横穴式石室が採用された。その後前方後円墳は消失し、代わりに切石積石室の中型円墳が支配者層の墳墓に採用され、7世紀後半以降になると古墳の築造が終焉し、古墳時代は終わりを迎える。

剣崎長瀞西遺跡　剣崎長瀞西遺跡は八幡台地の北端に位置する遺跡で縄文～古墳時代の遺構が数多く検出された。中でも、古墳時代中期（5世紀代）・後期（7世紀代）の横穴式石室を主体とする群集墳からは金製垂飾付耳飾・韓式系土器・最古級の馬具等の渡来人との関連が深い遺物が出土している。特に韓式系土器は、八幡台地上にある他の遺跡からも出土しているため、この地域に朝鮮半島から渡ってきた渡来人が居住していた可能性がうかがえる。

金製垂飾付耳飾　方形墳である10号墳から出土した。純金製で長さ7.8cmである。小さな空玉を兵庫鎖でつなぎ、先端には心葉形の飾りが付く。鎖を用いた垂飾は日本にはなく、朝鮮半島の加耶や百済との関係が想定される。一辺10m足らずの方形墳から金製垂飾付耳飾の出土例はなく、極めて貴重な資料である。

金製垂飾付耳飾

出土した轡　3号土坑からは鉄製の轡が、馬の口に装着された状態で出土した。轡は馬を引くための道具であることから、この馬は土坑まで引いてこられ、ここで殺されて埋葬されたと考えられる。殺馬儀礼は東北アジアの騎馬遊牧民で始まり、朝鮮半島を経て日本に伝わった。発見された轡は最古級の5世紀中葉以前と考えられる。

13号土坑 馬具出土状態

鵜の埴輪 ―保渡田八幡塚古墳―

榛名山東南麓にある、5世紀末の保渡田八幡塚古墳には、多数の円筒埴輪や形象埴輪が樹立していた。その一つに川魚をくわえた鵜の埴輪がある。首輪の表現があることから、鵜飼いの様子を再現した埴輪と考えられる。鵜飼いに関わる国内最古の資料である。

金銅製飾履 ―下芝谷ツ古墳―

高崎市箕郷町に所在する、6世紀の下芝谷ツ古墳から、金銅製飾履が出土している。全国でも20例ほどしかなく、谷ツ古墳のものは最古の資料である。実用品ではなく威信財と考えられる。

歯のある埴輪 ―山名原口Ⅱ遺跡1号墳―

6世紀後半の山名原口Ⅱ遺跡1号墳からは、歯がある人の顔の埴輪が出土した。歯をむき出しにした異様な形相をしていることから、被葬者を守護する盾持人埴輪と考えられる。

鵜の埴輪 保渡田八幡塚古墳
画像提供：かみつけの里博物館

金銅製飾履 下芝谷ツ古墳
画像提供：かみつけの里博物館

山名原口Ⅱ遺跡　歯のある埴輪

古代の前橋

6世紀中頃に百済から伝わった仏教は、天皇中心の国家建設を主導する思想として導入された。7世紀後半の天武・持統朝頃には鎮護国家思想が明確になり、仏教を機軸とした古代国家の形成が始まる。この頃、上毛野国に波及した仏教文化は、県内最古の寺院跡とされる山王廃寺跡に認められる。新国家建設期の仏教は、国による統制を強く受けていた。しかし、奈良時代から平安時代の始めには、寺院の造営は地方の有力者層へと広がる。そして平安時代半ばには、民衆の間にも仏教信仰が浸透してゆく。国家主導の仏教が民衆へ広まっていく過程を、前橋市内の遺跡や遺物によってたどってみる。

仏教文化の波及

山王廃寺跡から「放光寺」と描かれた瓦が出土したことから、山王廃寺は高崎市山名町の山上碑と、『上野国交代実録帳』に記載のある放光寺であることがわかった。また発掘調査で、壮麗な伽藍や多彩な仏教芸術品も確認されている。

山王廃寺近くの、愛宕山、宝塔山、蛇穴山の3古墳は、古墳時代末期に継続して造られた大型方墳で、山王廃寺造営氏族の墳墓と考えられている。8世紀には地方の中小豪族にも仏教文化が伝わる。赤城南麓にある白山古墳からは、和同開珎などとともに、仏具の佐波理（銅椀）が出土している。

「放光寺」銘平瓦

山王廃寺出土の塑像頭部

山上碑

白山古墳出土遺物

上野国府域の出土品

前橋市元総社町地内に想定されている古代上野国の中心「上野国府」域からは、多数の国府関連遺物とともに、多数の灰釉陶器や緑釉陶器が出土する。これらは平安時代の高級陶器で、上級官人等の贅沢品や仏具として京都や東海地方から搬入された。清里・長久保遺跡の墓坑から出土した緑釉陶器は、この地域の有力者の所有品と考えられる。

元総社蒼海遺跡群(13)出土の施釉陶器

元総社蒼海遺跡群(20)出土の国分寺瓦と寺院関連遺物

清里・長久保遺跡出土の緑釉陶器

地方寺院の造営

前橋市下大屋町にある上西原遺跡では、基壇建物をともなう一辺約70mの方形区画から、瓦塔片や「上寺」や「経」と墨書された土器などが出土した。8世紀末から9世紀の勢多郡衙の併設寺院と想定されている。

前橋市粕川町中之沢地内の赤城山中に、密教系の山岳寺院跡、宇通遺跡がある。宇通遺跡から100m下方の御殿遺跡では、密教法具「鐃」の鋳型が出土している。

上西原遺跡の方形区画と瓦塔
画像提供(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

赤城山中に造営された宇通遺跡

宇通遺跡　礎石建物

御殿遺跡出土の鐃鋳型

仏教信仰の拡がり

前橋市粕川町の中之沢・室沢遺跡群では、東海地方で生産された「原始灰釉陶器」が出土した。また、前橋市五代町の桧峯遺跡では奈良三彩小壺が出土している。どちらも、100年近くにわたり伝世され続けた仏具であり、仏教に関わる特殊事情が推察される。

粕川町深津に所在する一般集落遺跡の友成遺跡では、錫杖頭の鋳型が出土しており、集落内での錫杖の生産が考えられる。また、元総社蒼海遺跡群(91)では、小金銅仏が出土している。ともに平安時代の一般集落内の竪穴住居からの出土であり、民衆への仏教信仰の広がりがうかがわれる。

中之沢室沢遺跡群出土の原始灰釉陶器

桧峯遺跡出土の奈良三彩小壺

友成遺跡出土の錫杖頭鋳型

元総社蒼海遺跡群(91)出土の小金銅仏

古代の高崎

高崎市の展示では、飛鳥時代末から平安時代までを古代として扱う。これは、645年の「大化の改新」、701年の「大宝律令の制定」によって氏姓制から官僚制度・位階制度に切り替わったことによる。この時期の高崎地域では、711年に多胡郡が新たに作られるなど、中央の強い意志が働いていたと考えられている。

この時期には百済から伝来した仏教は上野国にも伝わり、各地に広まっていた。上野三碑である山上碑は、長利という放光寺の僧がつくった石碑であり、金井沢碑の碑文は、仏教の教えに従って一族が生きていくことが刻まれている。

古代の高崎は、片岡郡・多胡郡・群馬郡に分かれていた。片岡郡は今の八幡町や若田町を中心に石原町、寺尾町。多胡郡は吉井町と山名町、藤岡市の一部。群馬郡は旧群馬町と前橋市総社町、渋川市までと広範囲にわたっていたと考えられている。

片岡郡銘須恵器
（八幡六枚遺跡出土）

金井沢碑

多胡郡とは

711年、古代上野国に新たに設置された郡である。「続日本紀」和同4年3月辛亥（6日）条には、「上野国甘楽郡の織裳・韓級・矢田・大家、緑野郡の武美、片岡郡の山等の6郷を割いて、別に多胡郡を置く」とある。

多胡郡の範囲　現在の高崎市吉井地区から山名町一帯とみられるが、そこはかつて緑野屯倉や佐野屯倉など、ヤマト政権の直轄地が設定されていた領域であり、古くから朝廷との関わりが深い土地であった。そのため、奈良・平安時代には、上野国有数の一大手工業地帯（窯業・布生産）となる。建郡にあたっては、その経済力に期待する中央の意志があったと推定される。当時の朝廷は東北地方の蝦夷計略を進めており、その財源にあてられたとも考えられる。

多胡碑

多胡郡内郷域比定図

多胡郡の郷名

織裳郷　吉井町長根に地名が残る折茂地域が推定される。
韓級郷　吉井町神保に鎮座する辛科神社周辺が推定される。
矢田郷　吉井町矢田に地名があり、この地域が推定される。古くは「八田」と書いた。
大家郷　吉井町池にある多胡碑周辺が推定される。
武美郷　藤岡市に隣接する吉井町の南東地域が推定される。
山部郷　『続日本紀』に「山等」とあり、桓武天皇の諱である「山部」を避けて「山字」と改めたことから山名地域が推定される。

多胡郡正倉跡の発見　平成28年1月、東西16.8m、南北7.2mの、東西7間×南北3間の大型礎石建物が発見された。礎石が失われていても据付穴と根固めの石が検出されたことから、総柱建物であることが確認できた。なお、柱の間隔は2.4m(8尺)をはかる。これらの構造から高床の倉庫(正倉)と考えられる。

検出された礎石建物（正倉跡）

多胡郡衙正倉跡全景

多胡郡衙正倉想定復元図

中・近世の前橋・高崎

中世の遺物

前橋・高崎両市では、城館址など多数の中世遺構が調査されており、多くの遺物も発見されている。この時期には、軟質陶器と呼ばれる内耳鍋、鉢、擂鉢や、かわらけなどの日常雑器、および石臼などの石製品が多く出土する。また、常滑焼、瀬戸美濃産の陶器など国内産陶器だけではなく、青磁や白磁などの輸入陶磁器も出土している。

復元された箕輪城郭馬出西虎口門

青白磁梅瓶・古瀬戸瓶子　中国の景徳鎮窯で生産された青白磁の梅瓶は高価な希少品である。そのため、形態、装飾を模倣した灰釉陶器が愛知県瀬戸地方などで生産された。写真の古瀬戸瓶子は蔵骨器として使われていた。

元総社蒼海遺跡群　青白磁梅瓶

浜川北遺跡 古瀬戸瓶子

国府南部遺跡群の和鏡と銅製神像　遺跡は上野国分寺の南、高崎市塚田町と引間町一帯にある。出土した青銅製和鏡の背面にある文様は、山水、草花等を題材にした和風の特徴を持つ。また、銅製神像は、念持仏として身につけたものと考えられる。

国府南部遺跡群 和鏡と神像の実測図

茶道具・生活雑器　鎌倉時代に伝わった喫茶の風習は、戦国時代には武士の嗜みとなるほど流行した。そのお茶を挽くための茶臼、茶を飲むための天目茶碗は、大名、豪族などの上級武士の所有品である。

井戸跡から出土した茶臼
元総社蒼海遺跡群(105)

天目茶碗
元総社蒼海遺跡群(105)

仏教遺物

板　碑　板碑（武蔵型）は、埼玉県長瀞地方で産出する緑泥片岩製の供養塔で、13世紀から戦国時代にかけて関東地方に広く見られる。碑面には仏像を表す種子が彫られたものが多い。

前橋市富田遺跡群 中世墓
板碑・五輪塔出土状態

五輪塔　五輪塔は平安時代末期から造られ、鎌倉時代以降盛んになる供養塔である。仏教の五大思想（地・水・火・風・空）を表した石を積み上げている。

高崎市下滝町
慈眼寺の五輪塔
（近世の造塔）

宝篋印塔　石造の宝篋印塔は鎌倉時代中期以降に始まり、鎌倉時代後期に盛行した。

高崎市浜川町
来迎寺の宝篋印塔
（近世の造塔）

近世の始まり

本展示では、天正18（1590）年、徳川家康が江戸に本拠地を移してからを近世として扱う。家康は、自分の側近である井伊直政を箕輪城（所領12万石）、平岩親吉を厩橋城（所領3万3千石）に配した。これは、家康が上州の箕輪、前橋を重要視していたことのあらわれである。

高崎城　井伊直政は慶長3（1598）年に箕輪城から和田に移り、そこを高崎と名を改め、高崎城を築城した。その後の高崎城は、安藤氏、松平（大河内）氏などが城主を勤めた。

前橋城　前橋城は酒井氏（所領15万石）次いで松平氏（越前）の居城となったが、明和4（1767）年、利根川氾濫により本丸が崩壊した後、幕末まで城が再建されることはなかった。

前橋・高崎両市とも、城を中心とした街づくりが行われ、第二次世界大戦の戦禍による影響はあるものの、基本的な町割りは、数百年経った現在でも残っている。遺物は、16世紀末以降の伊万里焼など高級品だけでなく、「くらわんか」と呼ばれた椀や、徳利などの日常雑器も出土している。

前橋会場
2017年1月6日（金）－1月11日（水）
前橋プラザ元気21　1階 にぎわいホール　午前9時～午後6時
前橋市本町二丁目12-1

お問い合わせ先
前橋市教育委員会事務局 文化財保護課
〒371-0853前橋市総社町3-11-4　Tel:027-280-6511　Fax:027-251-1700

高崎会場
2017年1月14日（土）－1月23日（月）
高崎シティギャラリー　2階　第6展示室　午前9時～午後6時
高崎市高松町35-1

お問い合わせ先
高崎市教育委員会事務局 文化財保護課
〒370-8501高崎市高松町35-1　Tel:027-321-1292　Fax:027-328-2295